

反論を受け付けない気象学会は「学会」と言えるのか

槌田 敦*

私は現役時代に熱物理学と環境経済学を研究し、教育してきた。その経験から、「CO₂温暖化説」に反対している。

私はCO₂の温暖化効果を否定していない。しかし、この効果は、寒い時期と寒い地域を除き、圧倒的な水蒸気濃度により存在し得ない。それにもかかわらず、世界中がこのCO₂温暖化説に狂っている。原発推進の口実に使われ、炭鉱は閉鎖され、食糧は高騰し、森林は破壊されている。そして、寒冷化の危機について議論がおろそかになっている。

本誌『天気』52巻6号に河宮未知生氏による「CO₂温暖化説に対する疑問への回答」があった。そこで、私は2006年9月『天気』に「反論・CO₂濃度と気温の因果関係」を投稿した。CO₂増による温暖化ではなく、温暖化によりCO₂の増加である。

これに対して、編集委員会は査読意見と編集委員コメントをつけて、不採用を伝えてきた。私はただちにこれらの意見とコメントに対し説明して再投稿した。ところが、編集委員会は原稿を再返却してきた。その理由は「改善がない」であった。しかし、私は査読意見各項目にそれぞれ説明により対応している。編集委員会がこの説明に一切答えることなく返却するのは不当であると述べ、再々投稿した。そして「再々返却」、「再々々投稿」々々という次第となった。

私は札幌で開催された2007年度秋季大会で「CO₂温暖化説は間違っている」(講演番号 A217)を発表した。私の発表は、おそらく気象学会での最初の本格的CO₂温暖化説批判であろうが、大きな講堂は満員の盛況であったし、討論も活発にさせていただいた。これは物理学会でも、環境経済・政策学会でも同じ経験をしている。そして、それぞれの学会誌でも私の提起に

ついて誌上討論がなされている。「CO₂温暖化説」に対する不安は多くの学者にとって共通のものである。

ところが、本誌『天気』は掲載した記事への「反論」を受付ようとはしない。これでは気象学会は学会とは言えない。そこで掲載拒否について会場アンケートをお願いした。

会場でのアンケート回答は7通、手紙での回答は1通であった。多くは予想通り編集委員会の方針を支持するものであったが、「掲載は拒否すべきでない」、「反論、再反論により理解が深まる。掲載拒否は残念」という意見もいただいた。また、手紙でのアンケート回答では、放射冷却などについて数々の意見をいただいた。これらの問題点については、学会での討論としてなされるべきと思うので、「(補)放射冷却と大気汚染とCO₂濃度」を書き加え、第4回目の投稿をした。

また、このアンケートでは「気象学者の責任」についても問うた。私の質問の趣旨は、気象学者の提起した「CO₂温暖化説」により原発、炭鉱、食糧、森林など地球の大改造がなされている。もしもこの「CO₂温暖化説」が間違っていたとき、気象学者はこの地球大改造の原因となったことについてどのように責任をとるべきか、そして気象学会が反論を封じていることの意味を考えていただきたかった。しかし、そのような視点での回答は無かった。この「学者の責任と無責任」については次の2008年度春季大会で論じさせていただく。

また、査読意見に対し説明しているのに、これに一切答えることなく、編集委員会が「反論」を返却しつづけるのは不当である。今後も「反論・CO₂濃度と気温の因果関係」が『天気』に掲載されるよう求めつづけることにする。(2007年11月17日, 12月19日)

* 高千穂大学。

© 2008 日本気象学会